《幼児教育》

気持ちや考えを自分なりの言葉で話そうとする子を目指して
～「遊び」と「振り返りの場」の環境構成と援助の工夫～

那覇市立開南こども園　保育教諭　新垣　奈美子

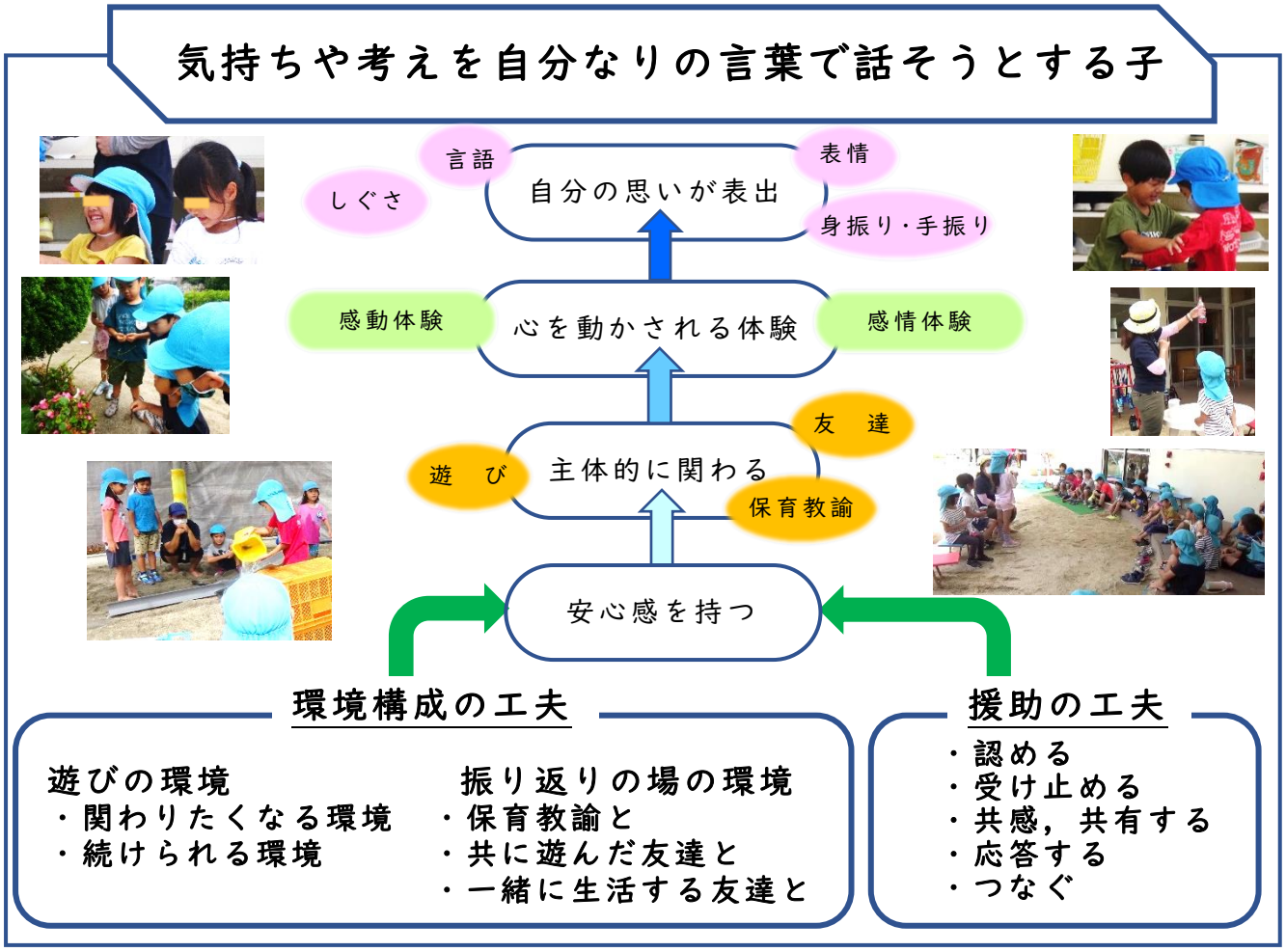
〈研究の概要〉

子どもは，保育教諭の意図を含んだ生活や遊びの環境に関わる中で，心を動かす様々な感情を体験する。そして，その感情を受け止め，共感したり，応答したりする身近な相手にその体験したことを話したくなる。

本研究では，気持ちや考えを自分なりの言葉で話そうとする子を目指し，心を動かされる体験ができるような遊びの環境構成と，振り返りをするための場所やタイミングなどの環境構成や保育教諭の援助を工夫し，実践に取り組んだ。

保育教諭は子ども一人一人と信頼関係を築き，子どもの遊ぶ姿を捉えた上で，子どもの心が動かされる，遊びの環境を整えていった。また，個々の育ちを踏まえて振り返りの場を工夫したことで，子ども達が，個または友達と一緒に，自分なりの言葉で話そうとする姿につながったと考える。

〈研究のイメージ〉



目　次

Ⅰ　テーマ設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ　研究目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅲ　研究構想図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅳ　研究内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　１　話そうとするために
　　(1) 話そうとする子とは
　　(2) 話したくなる体験と場について
　２　環境構成について
　　(1) 「遊び」の環境構成
　　(2) 「振り返りの場」の環境構成
　３　保育教諭の援助について

Ⅴ　保育実践・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　１　保育計画
　　(1) 実態把握
　　(2) 実践計画
　２　実践事例
　　(1) 振り返りの場で，好きな遊びで
　　楽しかったことを話そうとする姿
　　(2) 全体の振り返りの場の工夫により，
　　遊びのイメージを共有して話そうとする姿
　　(3) 抽出児の変容
　３　実践後の変容

Ⅵ　成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
　１　成果
　２　課題

《主な参考文献》

《幼児教育》

気持ちや考えを自分なりの言葉で話そうとする子を目指して

～「遊び」と「振り返りの場」の環境構成と援助の工夫～

那覇市立開南こども園教諭　新垣　奈美子

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

那覇市では，学力向上推進計画「ふくぎ　じんぶな～プラン」において，幼児教育から義務教育までの連続性を持った学びを通して，３つの資質・能力の育成が目指されている。こども園では幼児教育の充実と小学校以降の教育の円滑な接続を目指し，幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10 の姿)を手掛かりに，小学校との子どもの姿の共有に努めており，さらに幼児教育の具体的取組事項の一つとして，「心が揺さぶられる等の体験を，自分なりの言葉で伝え合う楽しさや喜びを味わうことができる援助の工夫をする」と記されている。園生活や遊びを通し“主体的・対話的で深い学び”のある教育・保育実践の充実に向けて，言葉の育ちを援助する保育教諭の役割が重要であるといえる。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領(以下，教育・保育要領)の領域「人間関係」のねらい(２)には，「身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。」と示されている。また，横山真貴子(2011)によると，コミュニケーションのひとつである言葉があることで，人間は互いにつながり合うことができ,人格を作り上げていくとしている。これらのことから，人格形成の基礎を培う幼児期において，身近な人に親しみ，愛情や信頼感を持ち，自身の気持ちや考えを伝えようとする言葉の育ちは重要であると考える。

本学級の実態として，進級児を中心に，保育教諭や友達と声をかけ合って関わり，遊ぶことを楽しんでいる子が多い。そして，遊びの中で楽しい気持ちになると，進んで保育教諭にそのことを話している。一方，遊びや活動などを明日への期待につなぐための振り返りの場においては，発表したいと積極的に手を挙げるが，言葉が出てこなかったり，話しても担任とのやりとりだけで満足し，共に遊んだ友達と共感したりする姿が少ない。自身の保育を振り返ってみると，子どもが体験したことを話そうとするための時間を十分に確保できなかったり，ゆったりとした雰囲気で話を聞いたりするための環境構成の工夫が足りなかった。また，子どもの思いをくみ取って先に声をかけてしまったことでその子が話す必要性を感じなかったり，周りの子達へその子の気持ちや思いを投げかけたりするなどの，子ども同士の気持ちや遊びをつなぐ援助が十分でなかった。これらのことから，振り返りの場が子ども達にとって話しやすい環境であったか，子ども一人一人を温かく受け止め，内面を深く理解し，園児の実態に応じた，その子なりの言葉を引き出すための援助が適切であったかという課題が見えてきた。

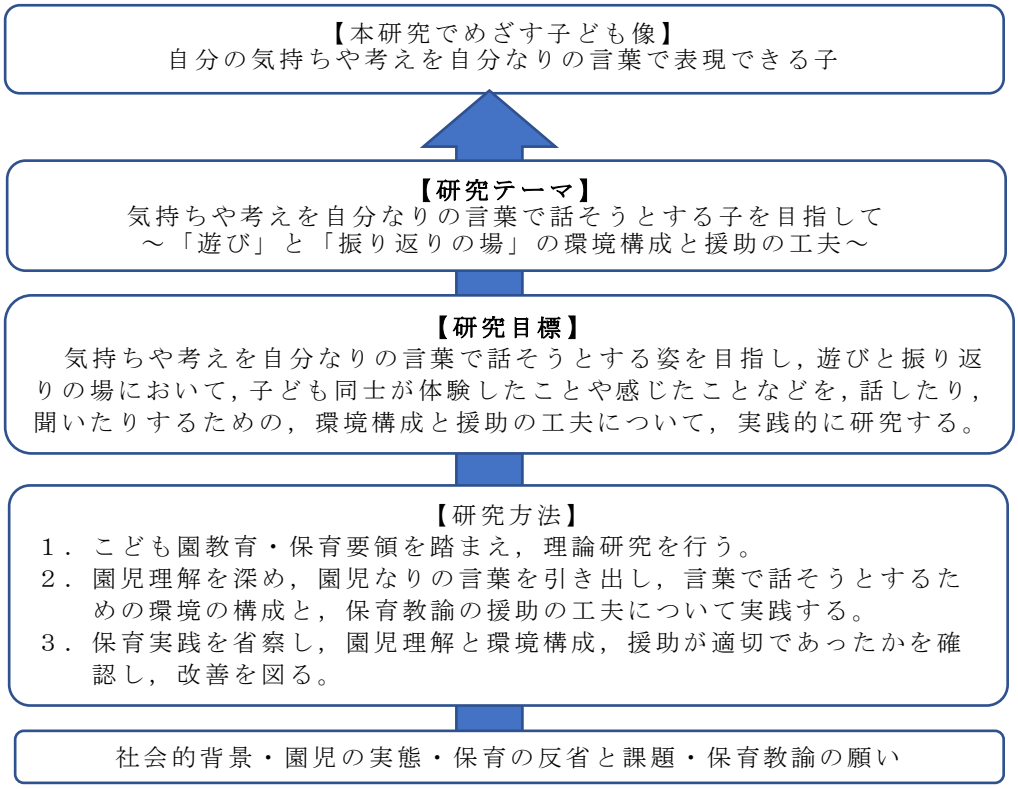
そこで本研究では，子ども達が話したくなる体験を重ねられるような遊びの環境構成と,それを振り返るタイミングや，場所などの環境構成の工夫を図る。そして，保育教諭が子ども達の気持ちや思いを受け止め，共感する援助と，子どもが体験したことや感じたことなどを表出するための援助を行う。それらを工夫していくことで，園児が気持ち

や考えを自分なりの言葉で話そうとするようになるのではないかと考え，本テーマを設定した。

Ⅱ　研究目標

気持ちや考えを自分なりの言葉で話そうとする姿を目指し，遊びと振り返りの場において，子ども同士が体験したことや感じたことなどを，話したり，聞いたりするための，環境構成と援助の工夫について，実践的に研究する。

Ⅲ　研究構想図



Ⅳ　研究内容

１　話そうとするために

(1) 話そうとする子とは

一般的に，３歳頃からの幼児期後期には，話し言葉の基礎ができ，日常の会話にはほとんど不自由せず，大人だけでなく，子ども同士でも，言葉でコミュニケーションを取ろうとするようになる。その基盤には，愛着関係と情緒の安定がある。幼保連携型認定こども園(以下，こども園)において，子どもが周囲の人々と言葉を交わす(話す)ようになるためには，保育教諭や友達との間に安心できる雰囲気や，信頼関係が成立していくことが大切であり，必要である。このことから，「話そうとする子」とは，身近な保育教諭や友達に対して安心感を持っている子であると考える。また，本研究では「話そうとする子」の姿を，言葉だけでなく，身振り・手振りを交えながら伝えよう(話そう)としている姿も含めて捉え，見取っていく。言葉の発達の途中である幼児期は，自分の思うことを，表情や泣く，怒るといった行動で表現することもあるこ

とから，保育教諭は，表情やしぐさ，視線などの，その子なりに表出している「言葉にならないサイン」をも見取り，真剣に受け止めるよい聞き手になることが重要であると考える。教育・保育要領解説をもとに，子どもの言葉にならないサインを表１に示した。

表１　子どもの言葉にならないサイン

・見つめる	・目を逸らす
・うなずく	・うつむく
・手をつなぐ	・座り込む
・そばに寄ってくる	・保育教諭から離れる等

教育・保育要領解説を参考に筆者作成

(2) 話したくなる体験と場について

子どもが「話そうとする」ためには，話したくなる体験が不可欠であると考える。話したくなる体験について，教育・保育要領解説では，「園児は、生活の中で心を動かされるような体験をしたときに、それを親しい人に言葉で伝えたくなる。」と記されている。「心を動かされる体験」について，大豆生田啓友(2019)は，「大人が考える特別な経験を指すわけではない。(中略)初めて，空き箱で飛行機をつくったこと等々。園生活を通して主体的に行う遊びや生活の中で行った小さな出来事に，子どもは心を動かしているのである。」と述べている。このことから，「心を動かされる体験」とは，毎日の生活の中にたくさんあり,子どもが環境に自ら関わっていく中で,気付いたり，試行錯誤したり，考えたりする過程で生まれる体験だと捉える。

子どもは，どのような場面で心を動かされる体験をするのかということについて，教育・保育要領解説には，表２で示すような場面が挙げられている。園生活が初めての集団生活の場となる子ども達にとって，園の環境に触れたり，様々なものを発見したりして，心を動かされる体験を積み重ねることが大切である。その中で，実体験を伴った言葉や自分の思っていることを，保育教諭に伝えたり，さらに，一緒に過ごす友達にも伝えたりする姿へとつながっていく過程が大切であると考える。そのために，心を動かされる体験をする「遊び」の環境構成と，話したくなる場としての「振り返りの場」の環境構成，また，それらを支える保育教諭の援助について研究していく。

表２　子どもが心を動かされる場面

・自然の美しさや不思議さに触れたとき
・楽しい活動に参加したとき
・面白い物語を聞いたとき
・友達ともめたとき　・挑戦して失敗したとき
・遊びの中で新たなことを思いついたり，何かに気付いたり，疑問を感じたりしたとき　等

教育・保育要領解説を参考に筆者作成

2　環境構成について

こども園における，教育・保育は環境を通して行われる。この環境とは，子ども達を取り巻くすべてのものを指し，大きく“物的環境”と“人的環境”に分けられる。本研究では,“物的環境”として遊びや振り返りの場における遊具や場所などを，“人的環境”として保育教諭の援助のあり方を研究していく。

(1) 「遊び」の環境構成

心身の発達が著しい幼児が，環境から受ける影響は大きい。子どもは，身近な環境に親しみ,興味関心を持って関わることで様々な感情を体験し,心を動かされていく。しかし，同じ環境に関わっても体験する感情や心を動かされる体験は，子どもによって異なる。若月芳浩(2019)は，こども園における遊びの環境について,「子どもたちと密接に関わっている物の存在はとても大切であり，子どもたちを取り巻く物によって子どもたちの遊びや育ちが変わってくるといっても過言ではない。(中略)子どもたちが過ごす環境として保育者の意図的な保育環境の設定が求められる。」と述べている。

子ども達の環境に関わって遊ぶ姿から，何に心を動かされどのような興味や関心を抱いているのかを見いだし，保育教諭が意図をもって環境構成をしていくことで，子ども達の心が動かされ，話そうとする姿につながっていくと考える。

この遊びの環境を次のように捉える。一つ目は，子どもにとって魅力的で意欲が促されるような「関わりたくなる環境」。そして，遊びや活動に取り組む中で試行錯誤を重ね，自分で行うことの充実感が味わえるような「続けられる環境」とし，これらを教育・保育要領解説をもとに，表３に視点としてまとめた。

表３　子どもの心が動かされる，遊びの環境

遊びの環境	視　点
関わりたくなる環境	①子どもの発達に即している。 ②子どもの興味・関心が引き出される。
続けられる環境	①十分な数量の遊具等がある。 ②遊びが広げられる空間がある。 ③遊び込める時間が保障されている。

教育・保育要領解説を参考に筆者作成

(2) 振り返りの場の環境構成

遊びの中で，喜びや楽しさ，悔しさなどといった，感動的・感情的な体験や，何かに気付いたり，新たなことを思い付いたりするなどの，心を動かされる体験をした子どもは，親しみをもっている保育教諭や友達に，そのことを伝えたくなる。しかし，保育教諭や友達と１対１で話すことはできるが，他の保育教諭がいたり，数人の友達がいたりすると，話せなくなってしまう子もいる。井上和子(2011)は「日々の保育の中で行われるさまざまな活動を通して，子どもたちが，必要な時に必要なことばを適切に使って積極的に話すことができるように，保育者は，その機会・場を用意してあげることが求められます。」と述べている。このことから，子どもが心を動かされた体験の中で感じた気持ちや考えを話そうとするためには，一人一人の発達や育ちを考慮した上で，子ども達が積極的に話すことができるよう，環境構成をする必要があると考える。そこで，子どもが気持ちや考えを自分なりの言葉で表現したくなる環境を，「振り返りの場」として，段階を踏まえて表４のように工夫する。

表４　振り返りの場の環境構成

振り返りの段階		環境構成の工夫
ア	１対１	保育教諭と，遊びを楽しんだその場で振り返る。【受け止められ，共感される雰囲気】
イ	小集団	共に遊んでいた友達と，保育教諭と一緒に遊びを振り返る。【友達の存在を身近に感じる雰囲気】
ウ	クラス全体	ア・イの振り返りで，子ども達から出た気持ちや考えをクラス全体で共有する。【イメージや期待を共有する雰囲気】

筆者作成

特にクラス全体で振り返りを行うことで，その日の遊びで楽しかったことなどを思い起こし，友達の話す内容から同じイメージを持つことができる。また，翌日の遊びに期待を持ち，その気持ちや思いを自分なりの言葉で話そうとする姿へつながっていくと考える。さらに，写真を用いて室内外の遊びの様子を可視化し，掲示を工夫することで，遊びの中で感じた気持ちや感情，イメージなどをより具体的に思い出し，友達と言葉で表現しやすくなると考えた。以上を踏まえ，振り返りの場の環境構成を工夫し，実践に取り入れていく。

３　保育教諭の援助について

こども園における園生活の中で，子ども達が自己を存分に発揮し，心を動かされる体験を重ねるためには，その体験をもとに、話そうとする姿へ向かうための援助のあり方が大切である。保育教諭が子ども達一人一人との信頼関係を築き，個々の実態を見極め，援助をするにあたり，大切な視点として表５に示す。子ども達が様々な形で

表した気持ちや考えを受け止め，共感・応答するといった，その子に合わせたアプローチや援助が大切であると考える。

そして，遊びが充実していくための，保育教諭の役割と，役割を果たす上での保育教諭の援助の視点を，表６に示し，実践において援助に生かせるようにしていく。

表５　信頼関係を築く際の保育教諭の援助の視点

援助		視点
①	温かく受け入れる	子どもの存在そのものを受け入れ，認める。
②	肯定的に受け止める	子どもの言葉だけでなく，表情や体の動きなどの言葉にならないサインも受け止め，理解していく。
③	共有・共感する	イメージや気持ちを子どもと分かち合い，共に感じ，考える。
④	応答する	子どもの行動に対して，保育者がくり返し、言葉で応答していく。
⑤	つなぐ	子どもの話を聞き，保育教諭が言葉を足したり，促したりして，友達とつないでいく。

筆者作成

表６　保育教諭の役割と役割を果たす上での保育教諭の援助の視点

役割		役割を果たす上での保育教諭の援助の視点
①	活動の理解者	子どもの遊びを見守り，今，その子が何に興味関心を抱き，遊びの中にどのような楽しさを見いだしているのか。子どもの中に何が育とうとしているのかを見取る。
②	共同作業者（共鳴する者）	子どもと動きを合わせたり，同じ目線に立ってみたりすることを通して，子どもの心の動きや行動を理解していく。
③	憧れを形成するモデル	保育教諭が自然の美しさに関心を寄せたり，活動を楽しんだりする姿は，子どもを引き付けるものとなり，身近な環境と子どもとの新たな出会いを生み出す。
④	遊びの援助者	子どもの遊びが深まっていなかったり，課題を抱えていたりする時には，保育教諭が適切な援助を行う必要がある。しかし，どのような援助を行うかは，状況に応じたり，その子の発達に合わせた援助の方法やタイミングを考えたりすることが重要である。

教育・保育要領解説を参考に筆者作成

Ⅴ　保育実践

１　保育計画

(1) 実態把握

４月，子ども達の話そうとする姿について実態把握を行った。遊びの場面では，自分の好きな遊びを，保育教諭や友達に声をかけて，一緒に楽しむ姿が見られ，楽しい気持ちになると，進んで保育教諭にそのことを話している。しかし，その日の活動の振り返りの場では，話したいと手を挙げる子が 10 名程と，クラスの半数以下であった。また，話したい気持ちはあるが，前に出ることを恥ずかしがったり，言葉が出てこずにうつむいたりする様子も見られた。その様子を観察していくと，進級児が手を挙げる姿が多く，毎回決まった子が話したい気持ちを表している姿が多い。また，手を挙げて立ちあがるが，話そうとする直前に「どんなことでも話して良いの？」と不安な様子で保育教諭に確認する姿もあった。

(2) 実践計画

○遊びの場の実践　●振り返りの場の実践		◇遊びの場のねらい・内容　◆振り返りの場のねらい・内容
６月（第２週）	○子どもの遊びの理解者・援助者となる。 ●子どもと１対１の振り返りを行い，その子の思いを受け止め，共感・応答する。	◇戸外，室内で思い切り遊ぶ楽しさを味わう。 ・砂場や色水等，自分のやりたい遊びを思い切り楽しむ。 ・アサガオやヒマワリの世話を喜んで行う。 ◆気持ちや思いを自分なりに表現する。 ・保育教諭や、仲の良い友達に気付いたことや思ったことを話す。
６月（第３週）	○子どもと共に遊びに参加し，遊びの共同作業者となる。 ●保育教諭と共に遊んだ友達と一緒に振り返る。	◇自分の好きな遊びを十分に楽しむ。 ・自分の気持ちややりたいことを，親しみをもっている人に話す。 ・友達と遊びのイメージを出して遊ぶ。 ◆自分の気持ちや思いを受け止めてもらううれしさを味わう。 ・保育教諭や友達に，気付いたことや気持ちを話す。

6月 (第4～5週)	○遊びの共同作業者となると共に，遊びの援助者となる。 ●クラス全体で振り返る。 ●写真を用いて遊びの様子を可視化する。	◇自分の好きな遊びを十分に楽しむ。 ・色水や石けんなどの素材を使って遊ぶ。 ・自分なりのイメージをもって遊びを楽しむ。 ◆自分の気持ちや考えを話そうとする。 ・友達の前で楽しかったことなどを話す。 ・気持ちや考えを自分なりに話す。

2　実践事例

子ども達が，遊びの中で感じた気持ちや考えを話したくなる場として，保育教諭と1対1の振り返りを丁寧に行っていった。そのやりとりの中から，3頁の表1及び表2で示す様々な感情・サインや，子ども達の友達関係の広がりを捉えていった。そして，一緒に遊びを楽しんだ仲間と小集団で振り返りを行うことにより，抵抗感を持たずに話す経験を重ねることができるようにした。また，遊びを振り返る場の環境として，戸外遊びを楽しむ際の，水分補給と休息の時間を利用した。子ども達がほっとするひとときに，一人一人が好きな遊びを楽しむ中で感じたことや考えたことなどを振り返り，子ども達の話を聞いたり，応答したりしていった。さらに，帰りの会には，その日の遊びの様子を写真に撮り，プリントアウトして子ども達と一緒に見ながら振り返り,その後の遊びや活動につながることを願って,その写真を教室内に掲示した。

(1) 振り返りの場で，好きな遊びで楽しかったことを話そうとする姿

	遊びの様子 環境：関わりたくなる⇒【関】 続けられる⇒【続】	振り返る場の様子 振り返りの環境構成⇒【振】 ⇒子どもの話そうとする姿	保育教諭の◇役割と◆援助
砂場	・トイを組んで水を流す遊びの中から，跳ね上がった水しぶきを見て，“水はなび”と表現した。【関②･続①】 ・大きく，高い“水はなび”を作るために，トイが外れても組み直し，流す水の量や勢いを繰り返し試していた。【続①②③】 A児：水を流したり，トイから跳ね上がった水を体で受けて、笑顔で遊んでいる。 B児：水がトイを流れ，跳ねる様子を間近で見ていたが，A児と入れ替わるようにバケツで水を流す側に回る。「行くよ！」と友達に声をかけて勢いよく水を流している。 C児：水はなびの横で，別に穴を掘り，水を溜めて遊んでいたが，A児やD児の声を聞いて，水はなびに関わり始める。 D児：A児と共に，トイから跳ね上がった水を体で受けて、遊びを楽しんでいる。	・話したいと手を挙げる子と，すぐに答える子が入り交じる。【振ウ】 A児：「水はなびして，濡れたことが楽しかった。」 B児：顔をしかめながら立ちあがり，少し間をおいて話す。 「A児さんと，同じ」 自分のシャツの裾を引っ張りながら，何と言おうか考えている。 B児：「(シャツの)色は変わってないけれど，服は濡れてる。」 C児：『パァーン』で片手を大きく回し，身振りで表す。 「あのさ，砂場のはなびをさ水流してさ，パァーンってやるのが楽しかった。」 D児：C児の後ろに座っていたが，その時の様子を思い出したように声をあげる。 「また，やりたい！」	◇子ども達から出た，“水はなび”という表現を受け止め，遊びの中でも積極的に使っていく。【役割①】 ◇子ども一人一人が考えた，トイの組み方や水の流し方を，具体的に言葉にして認めることを通して，一緒に遊びを楽しんでいる他児にも，アイディアがつながるようにしていった。【役割①④】 ◆A児の話に笑顔で共感し，遊んだときの様子や，気持ちが他児につながるような応答をする。【援助②③④】 ◆A児の話す際の姿を，拍手しながら十分に認める。【援助②】 ◆B児の話を受け止め，A児の話した内容を尋ねる。【援助②④】 ◆B児が話し出すまで，待ってみる。【援助①②】 ◆B児の話に大きくうなずき，ゆっくりと，B児の目を見て内容を繰り返す。【援助②③④】 ◆子ども達に聞き方を変えて尋ねる。【援助⑤】 ◆C児の話を笑顔で受け止め，身振りを真似して取り入れながら，話した内容を繰り返す。【援助②④】 ◆D児の自然に出た言葉を聞き，静かに受け止める。【援助①②】

色水	・自分たちで育てたアサガオや，園庭の草花を使い、色水遊びを楽しんでいる。【関①②】 ・毎日関わり，色や濃さの違いに気付く。繰り返し試していた。【続③】 ・担任が取り出した“魔法のスプレー”をかけることで，更に色が変化することを知り，喜んでいる。【関②】 G児：保育教諭について歩き，園庭を一回りする。いつも楽しんでいる色水作りを思い出し，関わり始める。 F児・H児：G児が保育教諭と一緒にいることに気付き，G児と一緒に色水作りに参加する。 ・保育教諭の言葉を聞き，３人それぞれが，違う色の色水ができることに期待を持って作り始める。 ・作っていく過程で，担任教諭の持っている“魔法のスプレー”を思い出し，H児が担任へ声をかけていた。 ・できあがった色水を，H児・G児・F児それぞれ，掲げて持ち，嬉しそうに笑顔で，保育教諭に見せに来ている。	・保育教諭が座っているベンチに話す子が座れるよう，スペースを作る。【振イ】 ・F児が戸惑っている様子と，他児の集中が切れてきた様子を見て，クイズ形式で話すことをF児に提案する。【振ウ】 F児：保育教諭の提案にうなずき，質問を保育教諭から聞く。 作った色水を見せながら，他児にクイズを出題する。 他児：園庭の様子を見たり，おしゃべりをしたりしていた他児も，F児に注目し，クイズの正解を答えている。 H児：F児・G児の後に，戸惑わずに立ちあがり，保育教諭の隣へ立って，クイズを出題する。 H児：他児の答えを聞くが，保育教諭の方を向き，つぶやく。 他児：保育教諭の声を聞いて，数名が答える。 H児：大きく２回うなずく。 H児：保育教諭と目を合わせてタイミングを合わせると，他児に届くほどの声で話す。 「せいかい」	◇色水を作る過程で出会う，感動に共感する。【役割②】 ◇遊びの中の気付きを認め，一緒に考えたり，じっくりと試したりする。【役割①④】 ◆F児の戸惑った様子を受け止め，F児とG児に，どのようなクイズにするか尋ねる。【援助②④】 ◆H児に耳を寄せ，つぶやきを聞き取りながら，他児へ伝わる声の大きさで，伝える。【援助①②⑤】 ◆クイズに答えた他児の答えを聞き，H児に正解を確認する。【援助⑤】 ◆H児に正解のかけ声を促す。【援助⑤】 ◆H児自身の声が他児に届くように，タイミングを見計らい，かけ声だけをかける。【役割②】【援助⑤】 ◆みんなに伝わる大きさの声が出たことを，十分に認める。【援助①③】 ※H児は抽出児として事例３でも紹介
石けん	・削って粉にした石けんと水を，泡立て器で混ぜ，泡作りに毎日関わっている。【関②・続①③】 ・色水を使って泡を立てることで，色付きの泡ができることを知り，前日に作った泡をペットボトルに詰めて，翌日も遊びに使っている。【関②・続③】 I児：高い位置に咲いているアサガオを，保育教諭に取ってもらい，色水作りを始める。作った色水を側に置き，作った泡に色水を混ぜ，紫色の泡を作って満足そうにしている。前日に作った緑色の泡を思い出し，紫色の泡に混ぜ始める。 	I児：保育教諭に，前に出るよう促されるが，座り続ける。 保育教諭が泡の様子を見せながら，他児に遊びの様子を伝える姿を見ている。 I児：保育教諭に質問され，思わず，姿勢が前のめりになる。しかし，その場から動こうとせず，そのまま答える。 ・I児の話したくなった気持ちを見逃さず，最後まで側でI児の話を聞く。【振ア】 I児：保育教諭が側に来たことで，保育教諭に作った泡の説明を始める。 	◇遊びの中の気付きを認め，一緒に考えたり，じっくり試したりする。【役割①②】 ◆前に出たくないというI児の気持ちを尊重し，その場にいて良いことを伝える。【援助①②】 ◆I児からボウルを受け取り，保育教諭が代わりに，他児に伝える。【援助⑤】 ◆他児に泡の，色の様子を見せながら，I児に質問する。【援助④⑤】 ◆I児の声をよく聞くため，側まで移動し聞く。【援助②⑤】
種取り	J児：水やりの際に，土の上にヒマワリの種が落ちていることに気付く。毎朝登園時に，ヒマワリ畑でヒマワリの種を拾って集め，喜んで保育教諭に見せている。 K児・L児：J児の姿に気付いて，好きな遊びの中で，種を探して集め，ビニール袋に入れて大切に持っている。 	・クラスの全体へヒマワリの種を紹介するが，３人の息が合わず，保育教諭のかけ声で声を揃えて紹介する。【振ウ】 L児：振り返りの間も，ビニール袋に入れたヒマワリの種を大切そうに持っている。 保育教諭に促され，前に出る。 J児・K児：種を持っていないことで出てくることを躊躇していたが，保育教諭に「大丈夫」と言われ，安心して前へ出てくる。 J児：ヒマワリの種を取った場所を，指で示しながら話している。 K児・L児：保育教諭へ話すことに夢中になり，他児ではなく保育教諭に体を向けている。	◇子ども達が自分たちで生活を進めていく様子を見守りながら，気付きを受け止め，思いを大切にしていく。【役割①④】【援助②③】 ◇発見を認め，種に愛着が持てるようにしていく。【役割①④】 ◆ヒマワリの種に愛着を感じ，大切に持っているL児の気持ちを受け止め，３人が楽しんでいる遊び(種取り)をクラスへつなぐ。【援助②⑤】 ◆前に出ることを楽しみにしている，J児・K児の気持ちを大切にし，具体物(ヒマワリの種)を持っていなくても，前に出て良いことを伝える。【援助②③】 ◆他児がヒマワリの種に関心を持ち，種探しに期待が持てるような声かけをする。【援助⑤】

考察

遊びの環境を整えることで，子ども達が主体的に遊びに関わることができた。その中で，保育教諭が「保育教諭の役割」を意識し，遊びの理解者，共同作業者，援助者となることで，子ども達の遊ぶ姿を捉え，遊びに合わせた援助を行うことができた。これらのことから，振り返りの場において子どもの話したい内容を予想することができ，言葉を足したり，友達とつないだりするなどの，一人一人の育ちを踏まえた援助につながったと考える。また，子ども一人一人が話そうとする姿を保育教諭が受け止め，応答することで子ども達が自分なりの言葉で話そうとする姿につながったと考える。

(2) 全体の振り返りの場の工夫により，遊びのイメージを共有して話そうとする姿

環境構成の工夫	☆教室にて，集まる前のリトミックや伝承遊びなどを楽しみ，皆で一緒の場で過ごす気持ちになり，円になって座る。 ☆保育教諭も子ども達と目線を合わせ，子ども達と一緒に座る。 ☆午前の遊びの中で撮影した写真を，遊びや活動毎に数枚，Ａ４版でカラープリントし，バインダーに留めておく。 ☆振り返り後は，可動式のロッカーの背やコーナー等に，遊びや活動毎に色分けしたカラー画用紙を台紙として貼り，写真をいつも見ることができるように掲示できるようにしておく。

○園児の姿・言葉　⇒子どもの話そうとする姿	保育教諭の◇役割と◆援助
○リトミックや伝承遊びを楽しんだ余韻が残り，少しそわそわしている様子の子もいる。	◇笑顔で子ども達に向き合い，振り返る場の理解者，援助者として，一緒に参加する。【役割①④】
○保育教諭が持っているバインダーに気付き，尋ねる。 「先生，今日も写真ある？」 「早く見たい」	◆子ども達の気持ちが保育教諭に向くような声かけをし，落ち着くまで待つ。【援助①】 ◆子どもの言葉を受け止め，応答する。【援助②④】
○写真を見て，どんな場面が写っているか，身を乗り出して見ようとする姿がある。 ○自分や友達が写っていることに顔を見合わせて喜んだり，遊びの場面を思い出す言葉をつぶやいたりする姿がある。 「○○さんと，□□が写っている」 「準備運動だよ」「(友達と顔を見合わせ)ねっ」	◆子どもの声を受け，バインダーを取り出して子ども達全体に見えるように，高く上げ，見える角度を意識しながら，ゆっくりと左右に動かす。【援助②④⑤】 ◆子ども達と一緒に写真を見ながら，子どもの話を受け止める。【援助②③】
○「準備運動」という言葉でイメージが出た様子。保育教諭の問いかけに数人の声が揃う。 「水遊び」	◆子どもから出た「準備運動」の言葉を聞き逃さず，応答する。【援助②④】
○水遊びで印象に残った遊びを話す子もいる。 「修行とかやったよ」	◆子どもの言葉を受け止め，「修行」の様子の写真を見せる。【援助③④】
○めくった写真を見て，勢いよく声が上がる。友達同士で予想する姿や，静かに両手で打ち上げはなびの様子を表す子もいる。 「(写真を指差しながら)あっ，水鉄砲してる」 「はなびだ。はなび」 「(あれ？という表情で)雨だよ。雨！」 「雨じゃない、はなび！」	◇◆自分が写っている期待に共感し，子ども達の問いかけに応答しながら，次の写真をめくる。【役割①】【援助③④】 ◆「水鉄砲」という言葉に応答していく。【援助④】
○写真から受けるイメージが異なり，互いの思いがぶつかるように，声が大きくなってくる。 ○保育者の問いかけにM児が笑顔で答える。 「はなび，打ち上がったよ！」	◆写真を見せながら，“雨”か“はなび”か，M児に尋ね，さらにその時の様子を尋ねる。【援助②④⑤】
○保育教諭の言葉を聞き，さらに，持ってきた台紙に気付き声を上げる。 「砂場のはなび！」	◇◆砂場で楽しんでいる“水はなび”につながるように言葉を出し，写真を貼った台紙を持ってくる。【援助⑤】 「“はなび”で思い出したよ」【役割④】
○保育教諭のつぶやきに，手を挙げながら答える子や，静かに手を挙げ，視線を送る子もいる。 「ぼく，(砂場ではなび)やったよ！」 「△△も砂場に入ってたよ」	◆子どもの気付きを受け止め，写真を見ながら，子ども達からの声を引き出すために前日に誰が“水はなび”に関わっていたかつぶやく。【援助②④】
○保育教諭の声かけに“水はなび”の大きさを，腕を回して表したり，声に出したりしている。 「大きい(水はなびを作りたい)！」	◆手を挙げた子ども達の声や姿を受け止め，明日の“水はなび”がさらに大きくなると期待できるような声かけをする。【援助②⑤】
○保育教諭の話に笑顔でうなずいたり，写真を指差して友達と見たり，友達と顔を見合わせた。 「(友達に視線を向けて)一緒にやろう？」	◆砂場での遊びに期待を持った子ども達へ写真を見せながら，共に遊ぶ仲間が増えていることを伝える。【援助①⑤】

翌日の園児の姿

・登園してきた子から，すぐに園庭で遊び始める。遊び出しの時間は，登園人数が少なかったからか，砂場に関わった子どもが担任を誘い，遊び始めた。
・友達が４人ほど登園してくると，先に遊んでいた子に気付き，すぐに砂場に関わって遊ぶ。一人が前日の“はなび”を思い出し，傾斜を大きくしようと，台の高さを調整したり，トイの組み方を変えてみたりして，どうしたら“はなび”ができるか，友達同士で相談している。
・暑さのため，室内に入ることを子ども達に知らせると，「もっとやりたかった」と遊び足りないとの声が上がったため，「明日はもっと，早くから砂遊びしよう」と約束した。

考察

・伝承遊び等を通して，子ども達が一緒の場で過ごす気持ちになるよう楽しい雰囲気を作り，互いの顔が見える位置に座れるようにしたことで，子ども達が話しやすい場となった。
・写真という視覚的にわかりやすい媒体を用いることにより，子ども達は振り返りに期待を持つと共に，写真からその時の気持ちが思い出され，勢いよく言葉が出てきたと考える。
・写真を見て受け取ったイメージが異なったことで，子ども同士の思いがぶつかる場面も見られた。そこで，保育教諭がそれぞれの思いを受け止め，M児のイメージとつなげたことで“はなび”という共通のイメージを子ども達が持つことができ，翌日の友達と相談する姿につながったと考える。

(3) 抽出児（H児）の変容

実践前のH児の姿

・新入園児として，年長から入園。新しい環境に戸惑っている様子があり，不安そうな表情が多く見られた。また，慎重な性格で，友達の様子を見て，身の回りのことを丁寧に行っている。しかし，分からないことや，困ったことがあっても，保育教諭や友達に自ら声をかけることがなかなかできずに，傍観していたり，泣いたりすることが多かった。

保育教諭の見取り

・新しい環境への強い緊張が伺える。H児が安心感を持てるよう，ありのままの姿を受け入れていくと共に，H児の視線や動きを捉え，本児が必要と感じたときに，すぐに手助けできる姿勢で援助していく。また，信頼関係を構築後には，保育教諭を拠り所として，園の環境に触れていけるように，保育教諭も一緒に環境に関わり，心を動かされる多様な体験ができるようにしていく。

月	H児の姿及び変容		保育教諭の◆援助
4月下旬	○保育教諭と，視線を合わせる時間が少しずつ増え，慌てて室内に入ろうとする姿が少なくなっていった。 ○保育教諭の言葉を聞いて，恥ずかしそうに体を揺らしたり，微笑んだり，小さな声で「おはようございます」とあいさつを交わすようになっている。	信頼関係を築く	◆登園時に笑顔で目を見てあいさつをし，本児の表情や視線に，気を配りながら，動きを受け止めていった。【援助①②】 ◆本児と視線が合ったり，明るい表情や微笑んで登園したりした姿を見逃さずに，その様子を言葉にして本児を認めるとともに，「元気なH児さんに会えてうれしい」など，保育教諭の気持ちも言葉にして伝えるようにしていった。【援助①②④】
5月上旬	○困りごとがあると，保育教諭に視線を送るようになり，尋ねられると，首を振って答えたり，選択肢の中から，本児の答えに合う単語を話したりするようになった。また，保育教諭に伝わらないと感じると，保育教諭の手を引いて，手伝って欲しいことなどを示すこともあった。	安心感を持つ	◆本児の視線が下を向いていたり，動きが止まっている様子が見られた際には，保育教諭から声をかけ，何に困っているのか具体的に聞いたり，選択肢を示して，答えを選んでもらうなど，本児にとって，答えやすい問いかけを意識して行っていった。【援助②③】
5月中旬	○安心した表情で，保育教諭に伝わるまで話そうとする姿が見られるようになった。	主体的に関わる	◆本児が答えたり，手伝って欲しいことなどを伝えようとしているときには，本児に目線の高さを合わせ，うなずきながら聞き，共感していく。【援助②③④】
6月中旬	○友達が保育教諭と話している姿をじっと見て，自分が話す順番を待っている。また，話が本児に向けられると，驚いた表情になることもあったが，共通の遊びを通して，友達と過ごす時間が徐々に増えていった。 ○友達と過ごす中で，笑顔が多く見られ，笑い声や，おしゃべりを楽しむ声も聞かれる。遊びに必要な物や，手伝って欲しいことなどを，自分から保育教諭に伝えるようになっている。また，遊びや活動の振り返りの場では，友達と一緒に前に出て，友達の話す様子を真似して話そうとする姿が見られるようになった。	自分なりに話そうとする	◆本児との関わりの中で，友達が関心を向けたり，参加してきたりしたときには，快く受け入れ，本児と友達との仲立ちをしたり，遊びの援助者となったりしていった。【援助④⑤】 ◆友達と一緒に遊びを楽しんでいる姿を見守るとともに，遊びの手助けをしたり，友達との関わりで，言葉を足したり，つないだりするなどの援助を行っていった。【援助⑤】

考察

・登園時の朝の出会いから，信頼関係を築く援助を丁寧に行ったことで，H児にとって，保育教諭が安心できる存在となったと考える。
・体の動きや表情から，保育教諭がH児の気持ちを推測して寄り添い，H児にとって答えやすい問いかけを心がけたことで，話したことが受け入れられる経験を重ねていくことができたと考える。
・H児と友達をつなぐ保育教諭の援助を通して，H児が友達と過ごす楽しさを感じることができたと捉える。また，友達と遊ぶ中で，自分の存在が受け入れられたことが自信となり，自分から保育教諭に話そうとしたり，振り返りの場で友達と一緒に話そうとしたりする姿につながったと考える。

３　実践を通した変容

７月，クラス全体での振り返りの場における子ども達の話そうとする姿について観察を行った。４月の姿と比較したところ遊びを楽しむ中で感じたことなどを話したいと手を挙げる子が多く見られるようになり（事例１），言葉にならないサインも含め「話そうとする姿」が 40％から 72％に増加した。遊びの場面においては，気付いたことや，気になったことなどを友達同士で進んで話そうとしたり，離れた場所にいる保育教諭の姿を探して話そうとしたりする姿が見られるようになった。さらに，保育教諭と信頼関係が築けたことで，話したことが受け入れられる安心感を持ち，振り返りの場において，自分なりに話そうとする姿も見られるようになった（事例３）。

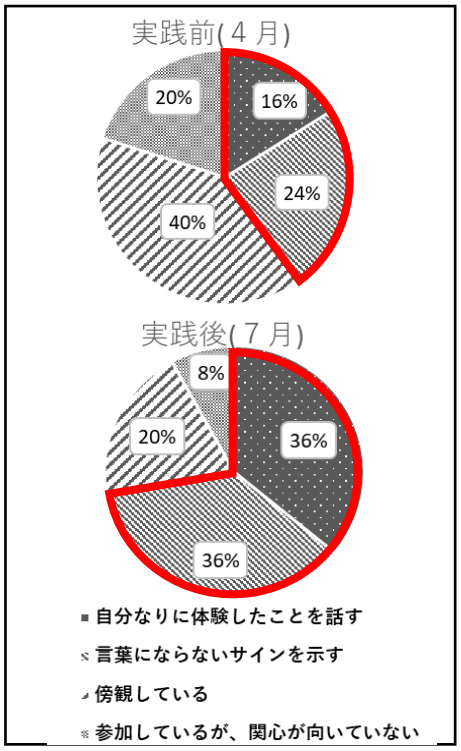


図１　話そうとする姿の変容

Ⅵ　成果と課題

１　成果

(1) 子どもの遊ぶ姿から，遊びの何に面白さを感じているのかを保育教諭が見取り，さらに，関わりたくなる環境と続けられる環境の視点を持って環境構成を行ったことで，子ども達が心を動かされる体験を重ねることにつながった。

(2) 振り返りをする際に，子ども一人一人の育ちに合わせ，保育教諭が肯定的に受け止め，他児につなげるように援助していったことから，クラス全体の振り返りの場において，子どもが安心感を持ち，心を動かされた体験を自分なりの言葉で話そうとする姿が見られるようになった。

２　課題

保育教諭が子どもの遊びに見通しを持ち，子ども達が遊びを広げたり深めたりしていく中で，言葉による伝え合いを楽しめるよう，環境構成と援助の工夫を継続して行っていく必要がある。

《参考文献》

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』
内閣府・文部科学省・厚生労働省　フレーベル館　2018
『子どもの育ちと『ことば』』　松川利広・横山真貴子・井上和子　保育出版社　2011
『保育・幼児教育シリーズ　言葉の指導法　改訂第２版』
大豆生田啓友・佐藤浩代　玉川大学出版　2019
『保育・幼児教育シリーズ　環境の指導法　改訂第２版』　若月芳浩　玉川大学出版　2019
『事例で学ぶ保育内容　領域　言葉』　無藤隆・宮里暁美　萌文書林　2018